

第1章 「総合的な学習の時間」の学習指導 — 三つの柱を進めていく —

学習指導要領（平成20年告示）では、学習指導のポイントとして「**探究的な学習**」と「**協同的な学習**」の二つをあげています。この二つに「**多様な体験活動**」を加えた三つが、「総合」の重要な柱となります。

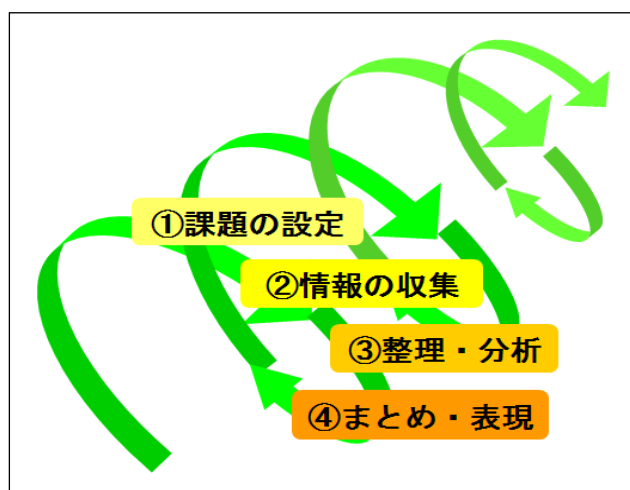
1 探究的な学習 ◇◆◇

『学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』には、「探究的な学習」について以下のような記述がみられます。

問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動のこと

『学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』

つまり、探究的な学習とは、一つの大きなテーマの下に課題を解決する過程を繰り返すことであり、一つの課題を解決することでまた新たな課題が生まれ、その課題に向かって粘り強く解決していく学習のことをいいます。

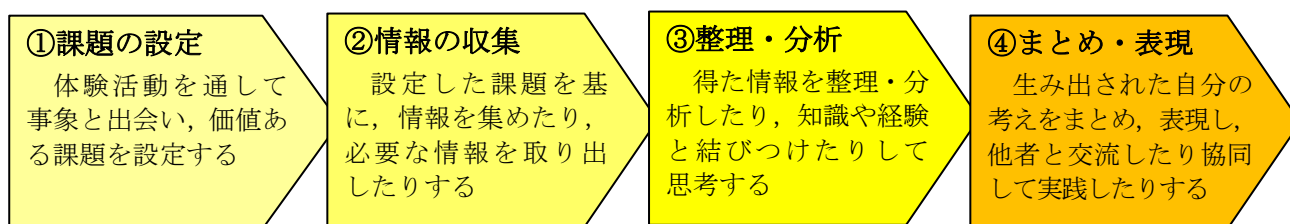


〈探究の過程〉

探究の過程には「①課題の設定②情報の収集③整理・分析④まとめ・表現」の四つのプロセスがあり、図1のようにそれらのプロセスがスパイラル（螺旋状）に連続していきます。

「総合」では、答えが一つに定まらない問題、容易には解決に至らない問題を扱います。それが、自分たちの住む町の魅力であったり、生き方の問題だったりします。

「総合」では、「何を学ぶのか」よりも「どのように学ぶのか」という探究の過程を重視しているのです。



この探究の過程は、いつも①から④のプロセスが順序よく繰り返されるわけではなく、順番が前後することもある。一つの活動の中に複数のプロセスが同時に設定されることもあります。

探究的な学習が実現することで、例えば、次のような子どもの姿が見られるようになります。

ものの見方やとらえ方が豊かになり、取組がより主体的になる

身に付けた知識や技能を活用することで、その有用性を実感することができる

自分に力が付いたことを実感し、学習意欲が高まる

そして、今まで概念としてとらえていた「もの」や「こと」に具体性が増し、より理解が深まっていきます。つまり、探究的な学習が実現することで、子どもたちの学びは一層充実したものになると同時に、生きる力が育まれていくのです。

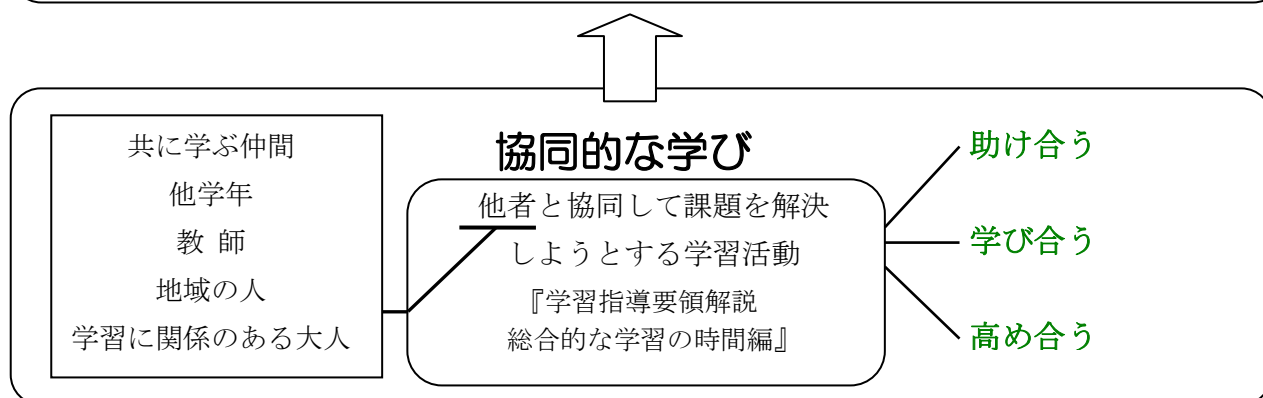
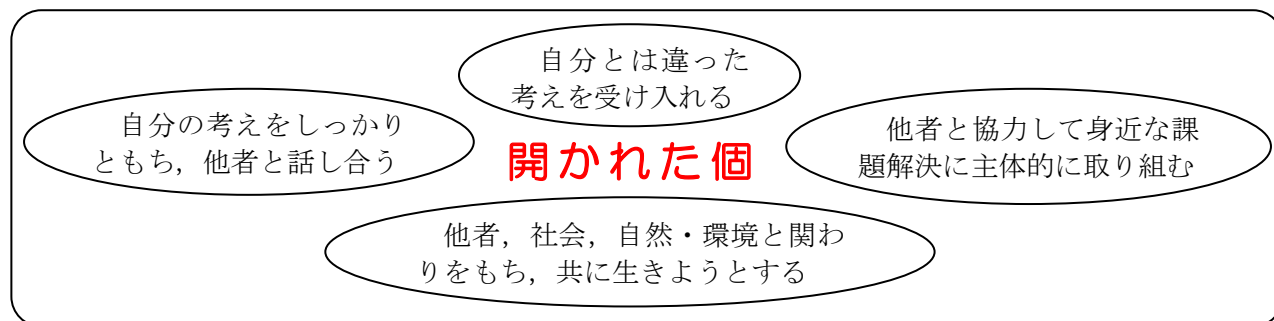
2 協同的な学習 ◇◆◇

『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』には、「開かれた個」について以下のような記述がみられます。

自己と対話を重ねつつ、他者や社会、自然や環境と共に生きる、積極的な『開かれた個』であることが求められる

『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』

「開かれた個」であるためにも、「総合」の協同的な学びは、大変重要です。



多様な情報を収集し、異なる視点で検討する活動

話し合うことで、互いの考えの共通点や相違点を発見したり、関連性に気付いたりする。

他者と協力・交流して取り組む活動

友だち同士で協力したり、地域の人や学習に関係のある大人などと交流したりする。

協同的な学びを行うことで、例えば、次のような子どもの姿が見られるようになります。

課題が多面的に検討され、自然や社会への認識が深まる

異なる考えをもつ他者を尊重する

相手意識や仲間意識が生まれる

社会参画への意識が目覚める

つまり、望ましい人間関係づくりを実践的に学ぶ上でも、協同的な学びは重要です。

また、協同的な学びを行うことは、自尊感情を高めることにもつながります。なぜなら、そうすることで他者とともに支え合っているという実感が生まれ、自分が社会の中ではなくてはならない大切な存在であることに気づき、そこに自己有用感が生まれるからです。

3 多様な体験活動 ◇◆◇

『学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』には、「体験活動」について以下のような記述がみられます。

児童が身体全体で対象に働きかけ実感をもってかかわっていく活動

『学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』

また、指導資料『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』に以下のような体験活動の例が示されています。

自然にかかわる
体験活動

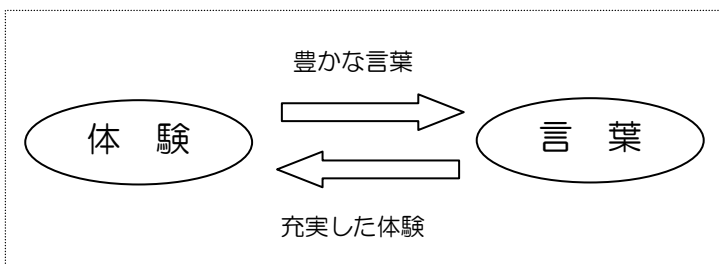
社会とかかわる
体験活動

ものづくりや生産、文化
や芸術にかかわる体験活動

『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』

日常生活や社会との関わりを重視するという点からも、体験活動は必要不可欠なものです。しかし、「体験さえさせておけば、『総合』の学習は成立する」という誤ったとらえ方ではなく、体験を一人一人の子どもにとって意味のあるものにしなければなりません。体験活動をすることによって、学びが一層充実することが大切です。そのためには、単元を構想する際、ねらいをはっきりさせて、付きたい力を明確にし、意図的に体験活動を設定することが重要です。

以前から、生活科・「総合」では、「体験と言葉」が大切であるといわれています。



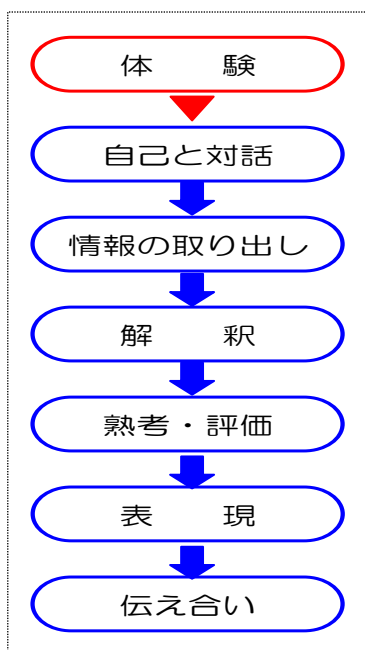
〈体験と言葉の関係〉

左の図に示すように、体験は言葉を豊かにします。そして豊かな言葉は、体験を充実させます。

例えば、以前、子どもが、実際に京人形の顔に目を描く体験をしたあと、「目を描くのは、人形に命を吹き込むことだと師匠が言っていたけど、本当にそのとおりだ。

息を止めて、神経を集中させなければ描けない。目を描くのはこんなにも大変なんだ。だからこそ、世界に一つだけの素晴らしい人形ができるんだ。」とワークシートに書いていました。このように言葉に表すことで、体験して感じたことが確かになると同時に、実感を伴った言葉が身に付いていくのです。そして、確かな言葉、豊かな言葉は、新たな体験を生み、更に体験活動が充実していきます。

体験して終わりではなく、体験した後に左の図に示す一連の活動を位置付けることが大切です。つまり、「総合」の探究的な学習の過程において、体験活動と言語活動を適切に位置付けることが重要なのです。



〈体験活動の充実〉